標点

岡山の「夢育」に寄せて

県生涯学習審議会・社会教育委員の会議　会長
（岡山大学全学教育・学生支援機構　准教授）
中山芳一

「ほぼほぼ（略々・粗々）」が、８度目の増版を迎えた『新明解国語辞典（２０２０年、三省堂）』へ新たに加えられました。このほか「歩きスマホ」なども加わり、辞書の中で起こる言葉の更新が、そのまま時代の変化をあらわしているようです。

時代の変化といえば、近年は特にＶＵＣＡ時代やＡＩ時代、人生１００年時代、Society5.0などと様々な表現がされています。そして、２０２０年から世界的に大打撃を与えてきたコロナ禍は、時代の変化にますます拍車をかけているところです。このような時代において、今を生き、これからを生き抜く子どもたちに求められる力として、テストでは点数化できない個人の人格や内面に焦点化された「非認知能力」が、私たちの共通言語になろうとしています。

そして、周知のとおり岡山県では、この非認知能力を子どもたちへ育むための「夢育」を始動しました。まさに、これからの時代のために必要な取組といえるでしょう。ところで、この「夢」の英語にあたる「dream」ですが、語源は古サクソン語の「drom」とされていて、楽しみや音楽などを意味するそうです。つまり、私たちが夢を持つということは、自分にとってやってみたい楽しみがあることと言い換えられます。従って、将来の職業といった遠い先の夢だけでなく、少し先にあるやってみたい楽しみも間違いなく夢なのです。

よちよち歩きを始めた頃、目の前のいろんなことに興味と意欲を膨らませていた子どもが、いつしか外側からやらされることばかりで妥協やあきらめを抱いてしまう。そこに追い打ちをかけるように、大人たちからは「しっかり夢を持ちなさい」「もっと主体的になりなさい」などの言葉をぶつけられてしまう。そんな岡山の教育や子育てにしたくはありません。私たち大人は、嬉々としている子どもと視線を重ね、そんな子どもの姿を喜び、一歩先の「やりたい」へ子どもと共に歩んでいきたいものです。それこそ岡山の夢育なんだと、胸を張れる日は近いと確信しています。